

# Muriel Spark の作品における‘scapegoat’の概念の考察

本 多 幸七郎

## 序論

スコットランド出身の Muriel Spark(1918-2006)の作品には日常的な出来事を題材にしたものが多いが、一読して何を述べようとしているのか、よくわからない難解な作品が少なくない。これは彼女の作品がまるで静物画のように、一つ一つの出来事に隠されたメッセージ、メタファー、象徴が込められているからで、いわば、彼女の作品を読むことは、まるで詩を読む、もしくは絵画を分析するかの如く、一つ一つのピースの意味を探しながらパズルを完成させるような精密な読み方が必要とされるからである。もちろん、そのピースはその作品ごとで異なるのだが、複数の作品の中にみられる、最も重要で代表的なピースの一つとして考えられるのが‘scapegoat’という概念である。もちろん彼女は作品中で、それとわかるような特定の概念を示す特定の言葉を一度も使ってはいない。だが明らかに‘scapegoat’を作品のコンセプトとして想定して書いているとしか考えられない作品がいくつか存在するのである。

本論はそれらの作品中の‘scapegoat’の概念と Spark の意図との関係性を考察するものである。

## 第一章 scapegoat とは

まずはすべての論考を始めるにあたり、‘scapegoat’の定義を確認す

ることから始めたい。

そもそも ‘scapegoat’ という概念は聖書のレビ記に初めて現れる。

彼はまたイスラエル人の会衆から、罪のための生け贄として雄やぎ二頭、全焼の生け贄として雄羊一頭を取らなければならない。アロンは自分のための罪のための生け贄の雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。二頭のやぎを取り、それを主の前、会見の天幕の入り口の所に立たせる。アロンは二頭のやぎのためにくじを引き一つは主のため、一つのくじはアザゼルのためとする。アロンは主のくじに当たったやぎをささげて、それを罪のために生け贄とする。アザゼルのためのくじに当たったやぎは、主の前に生きてままで立たせておかなければならない。これはそれによって贖いをするために、アザゼルとして荒野にときはなつたである。<sup>1</sup>

この記述からわかるとおり、‘scapegoat’ とは、本来は、古代イスラエルの儀式で、贖罪のために山羊に罪を背負わせ荒野に解き放ったことに由来するのだが、語源的には、ヘブライ語で書かれた原典を 1530 年に William Tyndale がヘブライ語の ‘ez ozel, (アザゼル) を誤読、もしくは誤訳（実際は「カナン人の悪魔」の意）し、英語に転用されたことに由来し、現在では、集団自体が抱える問題を解決するために身代わりとしてその責任を押しつけられてしまう個人、集団、民族、という意味で用いられている。<sup>2</sup>もちろん、これは本来のルーツとは意味が変わってしまっているのだが、結果として、James Frazer は『金枝篇』 (*The Golden Bough*, 1890-1936) の中で ‘scapegoat’ をこの意味で使用

<sup>1</sup> 日本聖書刊行会、『聖書（旧約）』（いのちのことば社、1985）p.183

<sup>2</sup> The Phrase Finder, ‘Scapegoat’ <https://www.phrases.org.uk/meanings/scapegoat.html>, (2018 年 1 月 28 日)

しており、Kenneth Burke、山口昌男等、多くの作家、研究者がこの解釈に従って多くの著作を書いており<sup>3</sup>、それゆえ、この解釈が一般的に流通しているものであると判断できるだろう。よって本論もまずはこの意味に従うことにする。

## 第二章 Spark の作品における 'scapegoat'

序論で述べた通り、Spark の作品は日常生活を題材にしておきながら、非常に難解な作品多いのが特徴といえるが、この最大の理由の一つが「二重性」である。彼女の作品はほとんどが二重構造になっている。本当の主旨の周りを何気ない日常生活を題材にした物語でカモフラージュした構造になっており、例えるなら、金庫の表の扉を苦勞して開けたら、その奥に、もう一つ隠し扉があるようなもので、物語中から、その二個目のカギを探してその扉を開けなければ、本当の物語の主題にはたどり着けない構造になっている。

繰り返すが、本論ではその代表的なものの一つが 'scapegoat' という概念であり、これを理解してその物語を読まなければ、その本質を理解できない作品が多く存在すると考える。そこで、まずはそのような作品を短編から考察していくことにする。

'scapegoat' という概念を主題として書かれた代表的な短編として考えられるのは "The Twins" (1945) である。この作品は数多くのアンソロジーに収録される Spark の代表的な短編の一つであるが、表向きはタイトルにあるとおり、双子の子供の存在を通して、「夫婦」の本質を描いた作品である。

スコットランド人の Jennie とロンドン人 (Londoner) の Simon は美しく賢い双子に恵まれた絵に描いたような理想の夫婦である。この夫婦の家に Jennie の幼馴染みの語り手が招待されるところから物語は

---

<sup>3</sup> 中村雄二郎、『術語集』(岩波書店、1984) p.106-110

始まるが、語り手がこの家に到着するや、様々な事件が起こり始める。

一つ一つの事件はお釣りの貸し借りであるとか、子供たちの駒をだれが壊したか、など、日常的な取るに足らない事件なのであるが、それらは語り手に妙な「違和感」を感じさせる。そして、それらの「違和感」は7年後の2回目の訪問の時にさらに顕著になる。

夜中にお腹がすかないようにとベッドの横にビスケットの箱を置いてくれた Jennie の優しさに対して語り手はいたく感動するが、夫の Simon はビスケットの食べくずをネズミが食べに来るから、ベッドのそばでビスケット食べるのをやめてほしいと語り手に懇願する。以前、Jennie が現れたネズミを見て卒倒したことがあるからだとして Simon は説明するのだが、語り手はビスケットを用意してくれたのは Jennie なのだと言って反論する。結局、以前訪問した時と同じような違和感を感じながらも、語り手は渋々ビスケットを食べないことを承諾する。

だが、最後のホームパーティーの車のガソリン代の立替の一件で、事態は急変する。

車でパーティーの食料を町まで取りに行った語り手は車にガソリンが足らなくなっていたことに気づいたので、ガソリンを補充し、後に、そのことをきちんと Simon に告げるのだが、パーティーが終わった後、Jennie は語り手に次のように述べる。

‘Well,’ said Jennie; ‘you know what men are like. I wish you had come to me about it. You know how scrupulous I am about debts. And so is Simon. He just didn’t know you had got the petrol, and, of course, he couldn’t understand why you felt hurt.’<sup>4</sup>

この後、語り手はすぐに自らにロンドンへの急用の電報を打ち、

---

<sup>4</sup> Muriel Spark, “The Twins” in *Collected Stories I* (London : Macmillan, 1967) p.132

Jennie と Simon、そして二人の双子に見送られながら、逃げるようにこの家を後にする。語り手のこの行動に対して語り手自らは何の説明もしないので、読み手はこの行動の理由を憶測するしかないが、上述したビスケットのケースと併せて考えてみれば、語り手はこの夫婦の間でトラブルが起こった際の 'scapegoat' として利用されていたことに気が付いたと考えることができる。

やはり Spark の代表的な短編である "A Member of the Family" (1961) もやはり 'scapegoat' を扱った作品であると考えられる。この作品は一読すると、Sparkらしいひねりのきいた大人のラヴストーリーだが、'scapegoat' というフィルターを通して見てみると、集団の中で 'scapegoat' にされる人間の顛末を描いた作品でもあるということがよくわかる。

この物語は主人公の Trudy が同じマンションに住んでいる年上の友達 Gwen と共に休暇で訪れたオーストリアの湖畔の町で知り合った Richard と付き合い始めるところから始まる。彼と同じ学校の教師である Gwen から様々な情報を集めながら、何とか Richard との結婚を画策する Trudy だが、いつまでたっても彼は母親に会ってくれとは言ってくれない。あきらめかけたその時について Richard から母親にと会ってほしいと懇願され、ついに彼と結婚できると大喜びで Richard の母、Lucy に会いに彼の自宅まで出かけると、そこにいたのは母 Lucy だけでなく Gwen をはじめとした過去に Richard と付き合い、捨てられた女性たちだった。Richard は付き合いしていた女性と別れるときは必ず母親の友達にするために自宅に招待する習慣があり、そして、今回は Gwen がすべてを画策し、Trudy を仲間に引き込んだのである。

先程も述べたように、この作品は、普通に一読すれば、少し奇妙ではあるが、ある意味必ずしも思い通りにならない「恋愛」を描いた物語であり、あるいは一夫多妻制を揶揄した物語とも読むことができる。だが、Rene Girard(1923-2015)の『身代わりの山羊』*Le Bouc Emissaire* (1982) の中の次の言葉を踏まえると、Trudy が Gwen によってかつて

の恋人 Richard とその母親 Lucy にささげられた ‘scapegoat’ であると容易に理解できる。

身代わりの山羊という表現からは、犠牲者に罪がないこと、犠牲者に対して集団が結束すること、この結束には何か集団にかかわる目的があること、などが明らかになってくる。迫害者たちは迫害表層の《論理》のなかに閉じこもり、もはやそこから抜け出すことができない。<sup>5</sup>

犠牲者というのは、もちろんこの場合 Trudy のことである。この作品の中で彼女はただただ結婚を望んでいた何の罪もない一人の女性である。その気持ちを Gwen に利用され、彼女は Gwen 自らが所属する Richard に捨てられた未婚の女性たちの集団維持、もしくは拡大のために Richard とその母親 Lucy にささげられるのである。

初期の Spark の代表的な短編である “The Portobello Road” (1958) もまた ‘scapegoat’ を扱った作品であるといえるだろう。この作品は表面的には幽霊である語り手がなぜ自分が幽霊になってしまったかを語るいわば怪奇小説の類のものである。この語り手は幼いころ、幼馴染の3人の仲間 (companion) George, Kathleen, Skinny と藁の山で遊んでいたときに、その山の中で偶然親指を針で刺されてしまったことから ‘Needle’ というニックネームをつけられる。その後、成長した彼らはそれぞれの道を歩み始めるが、アフリカのタバコ農園の経営を失敗した George から現地の女性と結婚して子供までいることを告白され、Kathleen と結婚するためにそれを秘密にするように強要された Needle が、Kathleen にその秘密を話すことを彼に告げると、どうしても Kathleen と結婚したい George に、かつて自分が ‘Needle’ というあだ

---

<sup>5</sup> ルネ・ジラル、織田年和/富永茂樹 訳『身代わりの山羊』(法政大学出版局、1985)p.65

名を付けられるきっかけになった藁の山で絞殺されてしまう。

普通に読めば、この展開は一人の女性が幼なじみに殺されるまでを述べただけのものだが、状況的には次の Girard の分析に奇妙なほどあてはまる。

たしかに、身代わりの山羊は本物の疫病をなおしたり、干ばつや洪水をなくならせたりすることができるわけではない。だがすでに述べたとおり、いかなる危機も、それがどのように共同体の人間関係に影響をおよぼすかというのが主要な点なのである。邪悪な互換性にもとづく人間関係がはじまり、自らの力で成長し、外的な要因の手をかりずに永続化しようとする。外的な要因、たとえばペストが作用しているかぎりには、身代わりの山羊には効力はないであろう。逆に外的要因が働かなくなれば、このとき最初に選ばれた身代わりの山羊が一切の害悪の責任を引き受けることで、個人間に生じた亀裂を解消し、共同体の危機に終止符を打つであろう。<sup>6</sup>

この Girard の分析のキーワードは「共同体」である。共同体の安定、維持のために人間は'scapegoat'を必要とするのである。事実、ここまでとりあげた Spark の作品に共通する要素はそれが「家族」であれ、「幼なじみ」であれ、'scapegoat'は「共同体」の維持のために作り出されている。George もそもそも4人の中で自分だけがうまくいかない人生を送っていることから、仲間から自分だけがドロップアウトすることを恐れ、Needle に自分の秘密を話すことで幼なじみという「共同体」を維持しようとする。そして最後にその秘密を暴露されることを恐れて Needle を殺害するのだが、その後、罪の意識に耐えられなくなった George の Needle 殺害の告白があつたにもかかわらず、大

---

<sup>6</sup> Ibid.p.72

した調査もされずに、まるで地域社会という「共同体」を維持させるためかのように、事件は迷宮入りしてしまう。

しかし、何と言っても、Spark が ‘scapegoat’ を扱ったもっとも重要な作品は、映画化もされた彼女の代表作である *The Prime of Miss Jean Brodie* (1961) である。この作品に登場する Mary Macgregor は作中で典型的な ‘scapegoat’ としての役割が与えられており、この点が理解できなければ、この作品の本質は理解できないといっても過言ではない。Girard は ‘scapegoat’ として扱われやすい人物を次のように述べているが、まさに Mary はこれにピッタリとあてはまる。

ある種の集団—たとえば学校の寄宿舎—では、外国人、田舎者、孤児、良家の子弟、文無し、あるいはただたんなる新入りなど、集団生活への何らかの困難を覚える個人なら誰でも、多かれ少なかれ障害者と同様の迫害を受けることがある。身体障害や不具が現実のものである場合、これに苦しむ個人は、《未開》の精神の持主たち迫害の的になりやすい。<sup>7</sup>

異常は身体の領域だけにかぎらず、生活と行動の全領域において存在しうる。また、異常はどんな領域でも同じように、被迫害者の選択にあたって優先的に基準となりうる。たとえば社会的な意味での異常。ここでは平均が正常の基準である。上下いずれの方向であれ、社会でもっともふつうだとされる地位から遠ざかっているほど、迫害の対象となる危険が増大する。<sup>8</sup>

Mary はこの作品の舞台である Marcia Blaine 女学校の教師、Miss Jean Brodie のお気に入りの生徒の集団 ‘Brodie set’ の一人であるのだが、次の描写に見られるようにあらゆる点において平均以下で、常に誰か

---

<sup>7</sup> Ibid.p.29

<sup>8</sup> Ibid.p.30



らも迫害の対象にされ、しかも、物語の当初で、23歳の時にホテルの火事で逃げ遅れて死亡することが示される。

Mary Macgregor, lumpy, with merely two eyes, a nose and a mouth like snowman, who was later famous for being stupid and always to blame and who, at the age of twenty-three, lost her life in a hotel fire, ventured, 'Golden'.<sup>9</sup>

Miss Brodie がこのような Mary を set の中に入れておくのは次の記述で分かるように明らかに意図的である。

'Who has spilled ink on the floor-was it you, Mary?'

'I don't know, Miss Brodie.'

'I dare say it was you. I've never come across such a clumsy girl.'<sup>10</sup>

そして、当然のことながら、同じ set の一員である同級生の Sandy Stranger も Mary の扱い方は Miss Brodie と全く同じになる。

So, for good fellowship's sake, Sandy said to Mary, ' I wouldn't be walking with you

If Jenny was here.' And Mary said , ' I know.' Then Sandy started to hate herself again and to nag on and on at Mary, with the feeling that if you did a thing a lot of times, you made into a right thing. Mary started to cry, but quietly, son that Miss Brodie could not see.<sup>11</sup>

Miss Brodie は明らかに、意図的に、そして無意識に 'Brodie set' を機

<sup>9</sup> Muriel Spark, *The Prime of Miss Jean Brodie* (London : Macmillan, 1961) p.13-14

<sup>10</sup> Ibid.p.16

<sup>11</sup> Ibid.p36-37

能させるために Mary を set に入れている。上述したとおり、その目的は自らを頂点とした‘Brodie set’という共同体の維持である。そう考えれば、“The Portobello Road”の Needle と同じように、後におとずれる Mary の死は偶然ではない。‘scapegoat’の行き着く果てが「死」であることはアウシュビッツ収容所の第二次大戦中のユダヤ人の虐殺が証明しているからである。

### 結論

ではなぜ、Spark はこのように作中で何度も、‘scapegoat’をテーマとして取り上げるのだろうか？

あらゆる資料を通じて、全人類史的に最大の‘scapegoat’が第2次世界大戦前後に起こったナチスによるユダヤ人やロマ族、身障者の大虐殺であることに異論を唱える者はいないであろう。具体的にはアウシュビッツ収容所でユダヤ人は150万人以上殺されている。ユダヤ系スコットランド人である Spark 自身はそのことを著作の中で直接述べることはしていないので、残念ながら彼女がこの事実をどのように考えていたのかは想像の域を出ないが、その一方で、彼女が絶えず、作品の中で主張し、問題としてきたことは次の引用にみられるような、自らが生涯を通じて‘exile’（追放者）であったということである。

Edinburgh is the place that, a constitutional exile, am essentially exiled from. I spent the first 18 years of my life, during the Twenties and Thirties, there. It was Edinburgh that bred within me the conditions of exiledom; and what have I been doing since then but moving from exile into exile? It has ceased to be a fate, it has a

calling.<sup>12</sup>

だが、考えてみれば、第一章のレビ記の引用からわかるように、もともと'scapegoat'とは「追放されて」野に放たれた山羊のことである。身代わりにされて犠牲にされたところが強調されすぎているが、実はこの「追放された」要素はこの概念を考察するうえで、極めて重要な部分である。なぜなら、この点から、Spark が絶えず、こだわりを見せてきた、'exile' という概念と、作品中でテーマとして落とし込んできた'scapegoat' という概念の間には連動性があり、少なくとも、この二つの概念には相関性があるといえるからである。言い方を変えれば、'scapegoat' という考え方の延長線上に'exile' という考え方が存在するということである。

ルネ・ジラルや、山口昌男はその著作の中で人類が常に普遍的に'scapegoat' を神話や儀式を通じて表現してきたことを論じている。<sup>13</sup> その観点から彼女の描く「何気ない日常の世界」を舞台とした作品を読むと、実はその世界が、'scapegoat' という概念を軸にした「神話性」を帯びた普遍的構造を持つものだけということがよく理解できる。つまり、Spark の'scapegoat' を扱った作品群は彼女個人の世界観を表現したものであると同時に、古典的つまり、普遍的な要素も兼ね備えたものなのである。その意味で'scapegoat' は決してユダヤ人等の特殊な人々、戦争という特殊な状況だけを対象とした問題でない。もちろんユダヤ系の彼女はそれに気づきやすい立場にいたことは事実である。だが、それが実は人類が生きていくうえで、戦争やペストというある特定の状況ではなく、日常的に常に起こりうる普遍的に向かい合わなければならない問題なのであるということを、自らの作品を通して表現しているのである。

---

<sup>12</sup> Muriel Spark, "Edinburgh-born" in *Critical Essays on MURIEL SPARK*, ed. Joseph Hynes (New York : G.K. Hall & Co. 1992 ) p.21

<sup>13</sup> 山口昌男著、『歴史・祝祭・神話』（中央公論社、1978）p.97-102